

宗教と戦争

奥村 快也 陸自70

アメリカの大統領の就任式で、私だ
けかもしれないが奇異に思うのは、聖
書に手をのせて宣誓を行うことであ
る。つまりキリスト教の神の前で宣誓
を行うということである。

考えてみると、アメリカはメイフラ
ワー号で渡ったピューリタン、つまり
新教徒・プロテスタントを祖先とする
国である。ケネディ氏が大統領になっ
たときに話題になったのは、彼の出自
がいわゆる旧教のカトリックだったこ
とであるが、これはキリスト教の新旧
だけの話である。トランプ大統領が、
イスラム教徒の入国に制限を設けたと
きに大きな反対はあったが、それを受
け入れる素地がアメリカにはあったと
いうことである。アメリカは当然なが
ら世俗主義、つまり政教分離の国であ
るが、アメリカ国民の多くは宗教とい
うものに強い拘りを持っているので
ないだろうか。それでなければトラン
プ大統領が、イスラム教徒の入国を拒
否するなどは言わないだろう。

そもそも、カトリック対プロテスタ
ントの間にも血を血で洗う凄まじい抗

争の歴史がある。

歴史の講義をするつもりはないが、
ルター期の宗教改革やカルビンの宗教改
革に端を発する新旧キリスト教の宗教
戦争である。その中でもっとも有名な
のは所謂30年戦争で1618年から始
まり1648年のウエストファリア条
約でそれぞれの国の主権と宗教が尊重
されることになったが、ドイツの国民
は30年戦争前に1600万人だったのが、
戦争後1000万人に激減した。
つまり、それほど人的損害がなけれ
ば、宗教戦争は収まらなかったのだら
う。

イスラム教は610年、ムハンマド
がアッラーの神の啓示を受けたという
ことで始まる。コーランを経典として
いるが、不思議なのは、その源流もユ
ダヤ教やキリスト教と同一らしいとい
うことである。それぞれが祖父を同じ
くする一神教なのである。その後、キ
リスト教とイスラム教はイスパニヤの
イスラムゴルドバ、十字軍のエルサレ
ム奪還やオスマントルコのウィーン侵
攻など、たび重なる抗争を繰り返して
いる。

そして現在であるが、おおまかなタ
イムスケールで見ると、イスラム原理
主義ともいべきISなどがカリフ国
を宣言したのは、ムハンマドがイスラ
ム教を宣言したのちの現在であるとい

うことを考えると、キリスト教のプロ
テスタント対カトリックの宗教戦争と
現在のイスラム原理主義の発生は時間
の軌を一にしていると思われる。双方
とも発生から1400〜1500年後
に大きな揺り戻しがあった、または今
あるということである。更に言うと、
現在のシリアはじめイスラム諸国から
の避難民などは宗教戦争の時のドイツ
からの難民と重なって見える。

『神は妄想である(原題 THE GOD
DELUSION)』という本を、利己的な
遺伝子で有名なりチャード・ドーキン
スが2006年に刊行している。(日
本版は2007年出版)

その中で彼は、それぞれの一神教を
信じて他の宗教を排斥して、ましてそ
れを理由に戦争をすることの愚劣さを
様々な側面から説いている。そしてキ
リスト教をはじめとするイスラム教、
ユダヤ教などの一神教などを信じるこ
となく、極論すれば無神論者になれと
言っているのである。

昔の話であるがアメリカに行く時
に、先輩から指導されて絶対に言っ
てはいけないことの一つが、自分は無神
論者である、ということである。『神
は妄想である』を読むと、自分は無神
論と言ったとたん、過半数の人から信
頼を失うという。

ヒトラーがユダヤ教徒を600万人

虐殺したホロコーストを、現代で支持
する人は当然ほとんどいない。しかし
宗教間の対立は、現代でもなくなつて
はいない。IS、イスラミックスター
トがカリフ国を宣言して、コーラン、
すなわち神の教えに基づく国を造らう
としたことは、つい最近のことである。
そして日本人のジャーナリストを始め
とした処刑をインターネットに載せて
配信した。規模こそ違えその思想は、
ヒトラーのホロコーストと同じであ
る。その国はアメリカ・イラク、イラ
ン、シリア等、既存の国にせん滅され
た様に見えるが、まだその影響力が
残っているかもしれない。

カトリック対プロテスタントの宗教
戦争のタイムスパンで考えると、この
イスラム教の新しい原理主義対既存の
イスラム教、またシリア派対スンニ派、
パレスチナ紛争、さらにはアメリカを
はじめとするキリスト教の国々とイス
ラム諸国の対立抗争は複雑になったぶ
ん、収まるまで100年以上のスケール
で考える必要がある。みんながへと
へとになって、神様のために殺しあう
のが馬鹿々々しいと思うようになるま
で続くのであろう。

私たちの国は八百万の神々を不思議
と思わない国である。山にも川にも
木々にも神様が宿っているということ
を幸せに思う。